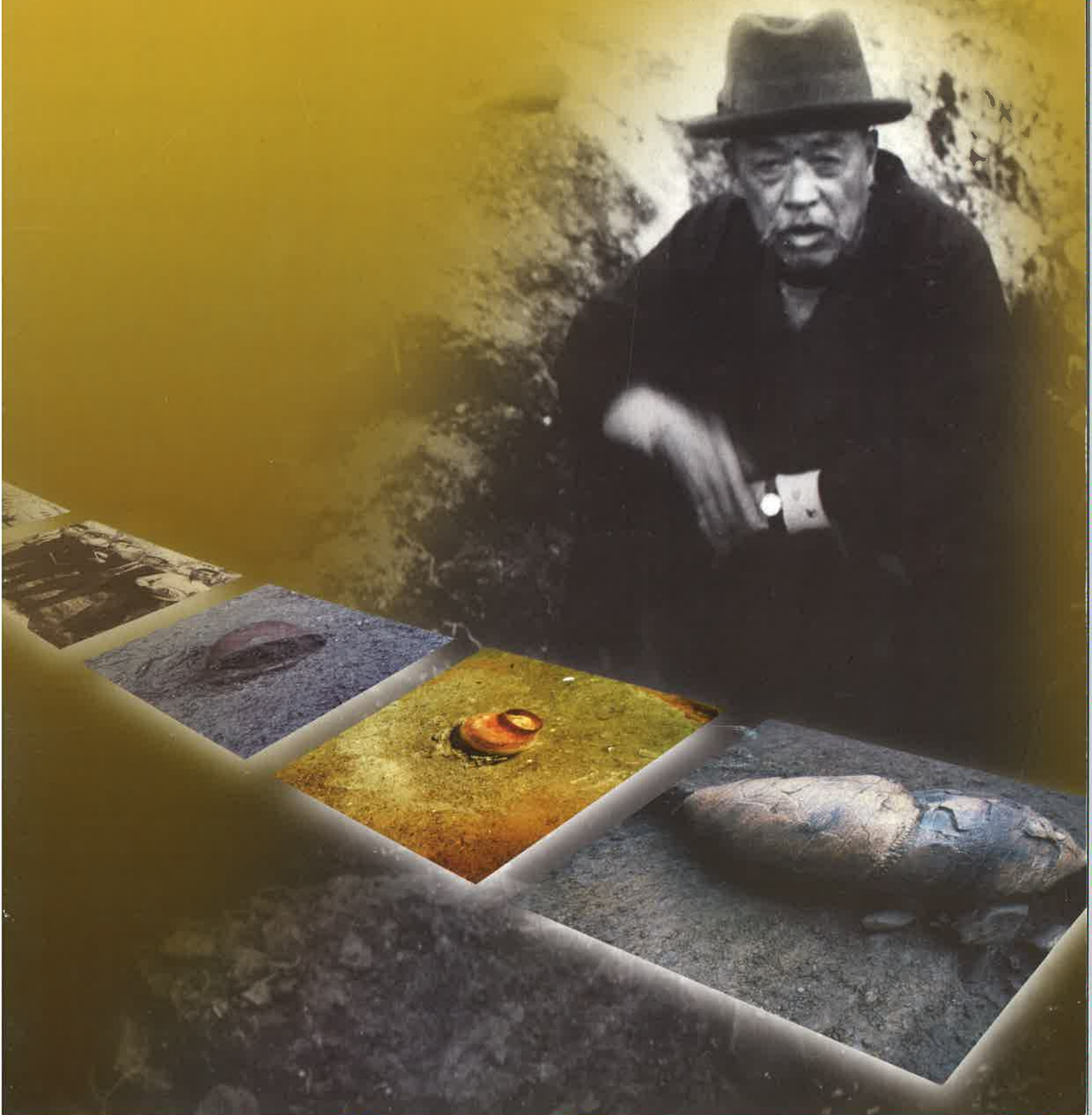


北近江考古学事始め

—地域史を語り続ける埋蔵文化財—

米原市教育委員会

2013.3



北近江考古学事始め

—地域史を語り続ける埋蔵文化財—

発掘調査黎明期の遺跡群

I. 北近江考古学事始め

1. 北近江ではじめての発掘 —杉沢遺跡—

II. 小江慶雄と北近江の遺跡

1. 番の面遺跡
2. 醍醐遺跡
3. 葛籠尾崎湖底遺跡

在野の研究者群像

III. 粕淵辰次 採集資料

1. ときをこえて、多種多様な遺物
2. 高溝周辺の遺跡が語る開発史

IV. 磯崎文五郎 採集資料

1. 干拓にかよひ歴史を探究
2. タイムカプセル“入江内湖遺跡”

行政発掘と大学との協働

V. 行政発掘の始まり

1. 北近江での発掘
2. 米原市内での発掘

VI. 新しいあゆみ —大学との協働—

1. ふたたび杉沢遺跡の発掘



粕淵辰五郎(辰次氏の父) 採集資料

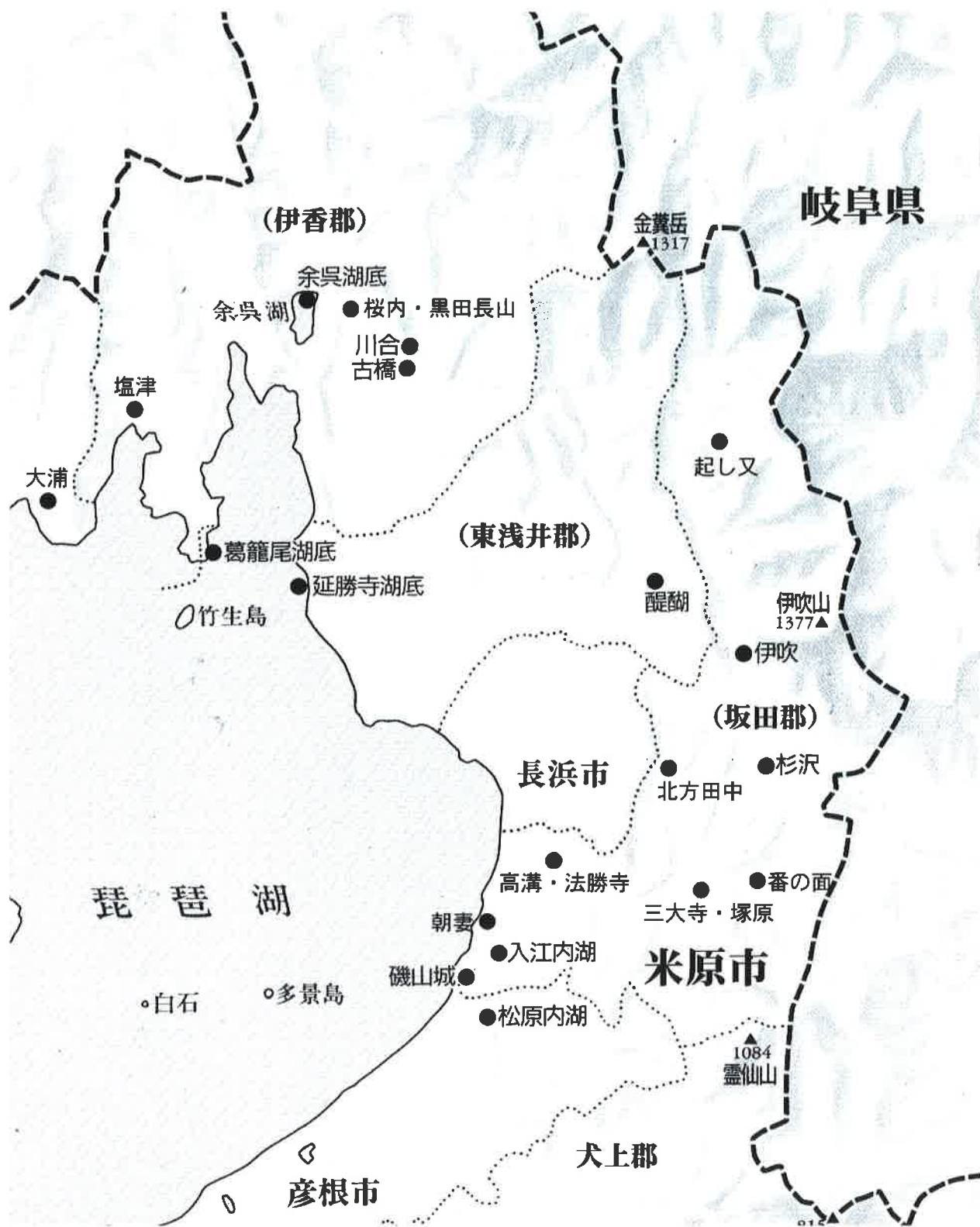
平成23・24年度、米原市と立命館大学考古学コースが共同で杉沢遺跡(米原市杉澤)の発掘調査をおこないました。杉沢遺跡は、大正13年に『考古学雑誌』で紹介され、昭和13年の発掘調査で縄文時代晩期の埋葬法である「あわ ぐちかめかん合せ口甕棺」が出土しました。これが、北近江における初めての発掘調査です。さらに、番の面遺跡(米原市梓河内)では、昭和30年に西日本で最初たてあなじゆうきよの竪穴住居が確認されました。在野でも粕淵辰次氏かすぶちたつじ・磯崎文五郎氏いそざきぶんごろうらが、遺物の収集と保管、調査をおこない膨大な資料をのこしました。米原から始まった北近江の考古学。ここでは、北近江の考古学の歩みと成果、今後の展望を紹介します。

『まいばら 時代ブラザーズ』

わたしたちが案内するよ!!



イラスト/高橋健太郎



関係遺跡位置図

米原市と長浜市で構成される北近江(滋賀県東北部)は、古代には、南から坂田郡、浅井郡、伊香郡に分かれていました。坂田郡は、北上してきた東山道(中山道)がここで東に向きをかえ東国にいたり、琵琶湖岸には朝妻湊がおかれ、北国街道が北陸へ抜けます。さらに北国脇往還が東端の伊吹山麓を通過する交通の要衝です。北への道は、浅井、伊香で合流して越前武生に通じ、琵琶湖に臨んで古代からの要港塩津、大浦も、越前敦賀に通じます。北近江は東海、北陸との結びつきがきわめて強く、湖上交通によって琵琶湖沿岸各地や都をつなぐ重要な位置にあります。

発掘調査黎明期の遺跡群

I 北近江考古学事始め

1. 北近江ではじめての発掘 —杉沢遺跡—

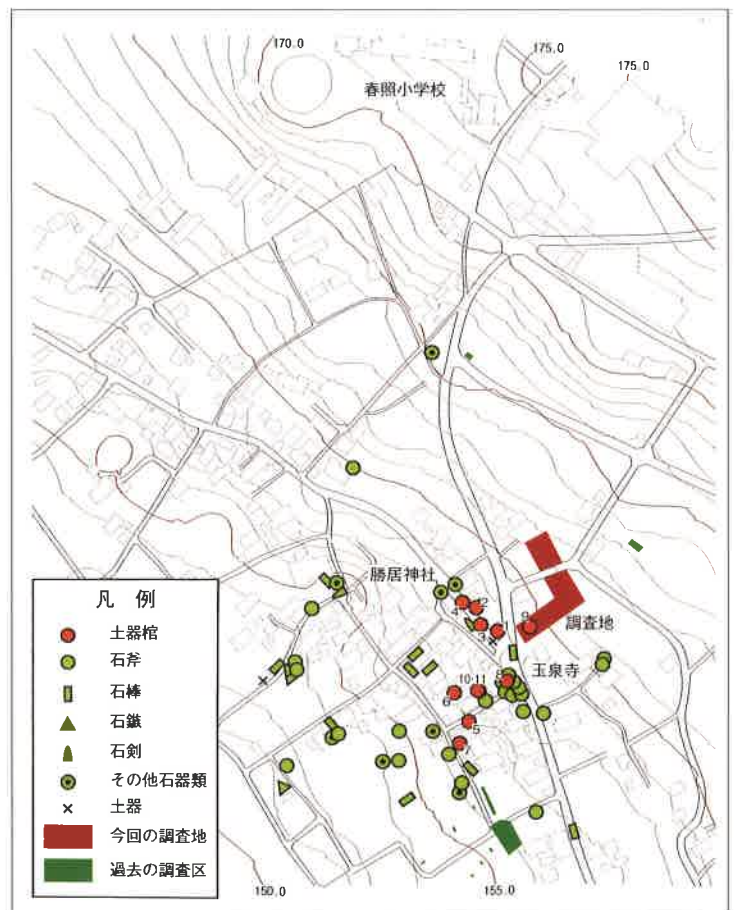


明治時代以降、杉沢では石器が出土することが知られていました。大正13年(1924)に郷土史家・中川泉三氏が御物石器と磨製石斧を『考古学雑誌』(13-14)に紹介したことで本格的な調査が始まりました。昭和初期には島田貞彦氏や柏倉亮吉氏が紹介しています。

杉沢遺跡の調査は昭和13年(1938)に京都大学助手(当時)の小林行雄氏らによって「これらの石器を伴出する土器の性質を確かめる」ことを目的に、北近江で最初の発掘調査が勝尾神社付近でおこなわれました。調査の結果、2組の縄文時代晩期後半(約2,500年前)の「合せ口甕棺」を検出し、以後『通論考古学』や『日本考古学辞典』などに紹介され、杉沢遺跡を一躍有名なものとなりました。昭和29年(1954)には、京都学芸大学(現京都教育大学)の小江慶雄氏による調査がおこなわれ、合せ口甕棺1組が出土しました。



伊吹山麓の杉沢遺跡(伊吹山頂から)



杉沢遺跡遺物分布図(立命館大学2012「杉沢遺跡」)

合せ口甕棺

平成7年に土器で蓋をした甕棺が出土。平成15年には2組の合せ口甕棺が出土して、中から焼けた人骨が見つかりました。このうちひとつは晩期中頃の杉沢遺跡最古の甕棺です。これまで11基が出土しています。合せ口甕棺は、縄文時代晩期中頃に北陸や湖西地方に現れ、晩期終わり頃東海地方に広がった埋葬方法です。両地域を結ぶ接点に杉沢遺跡があります。



昭和13年出土の合せ口甕棺(市長浜城歴史博物館)



昭和13年の発掘調査風景



郷土史家・中川泉三と合せ口甕棺(昭和13年・杉沢遺跡)



昭和29年出土の甕棺



京都学芸大の調査(昭和29年)
(右から郷土史家・樋口 元、小江慶雄)



平成7年出土の甕棺



平成15年年出土の甕棺

多種多様な石器群

これまでの発掘規模は大きくありませんが、出土した石器は良好かつ特徴的で、石鏃^{せきぞく}や石皿などの一般的な生活用具のほかに、多頭石斧^{たとうせきふ}や大小の石棒、石剣^{せっけん}、鯉節形石器^{かつおぶしがたせつき}、玉、県内唯一の御物石器^{ぎよぶつせつき}などの儀礼的性格の強い石製品が多数出土しています。



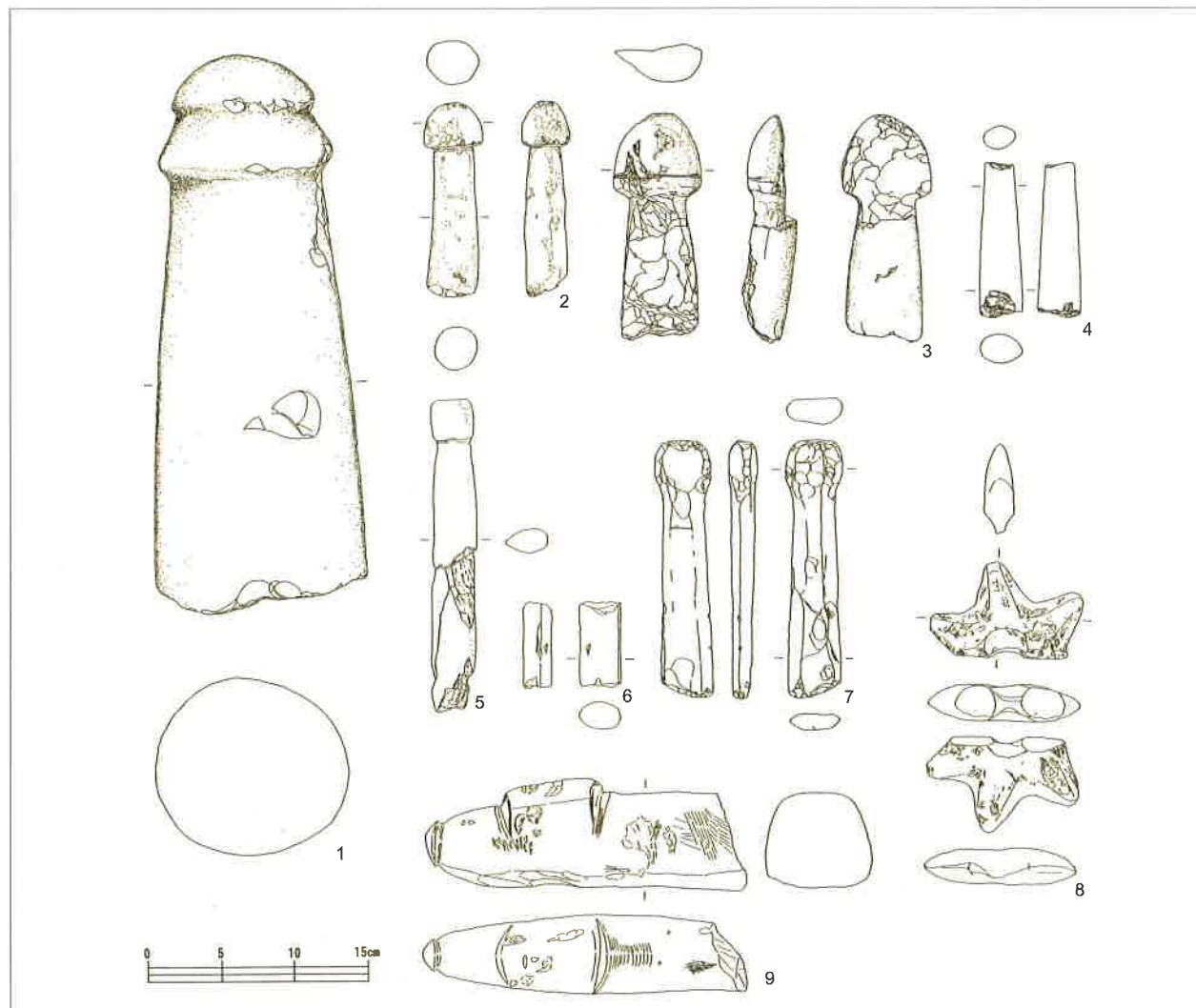
杉沢遺跡の御物石器（県立琵琶湖文化館蔵）

御物石器

明治11年、天皇の北陸・東海巡幸のとき献上され、皇室御物になったことが学術名称になっている呪術具です。晩期前半に岐阜県を中心とした狭い範囲に分布していて、滋賀県では杉沢遺跡でしか見つかっていません。本資料は下部の盛り上がりを欠いています。



御物石器（富山県南砺市高瀬神社蔵）



杉沢遺跡の石器類（1～4 石棒、5～7 石剣、8 多頭石斧、9 御物石器）

II 小江慶雄と北近江の遺跡



小江慶雄（1911～1988）
（『琵琶湖の神秘』より転載）

小江慶雄氏(1911～1988)は、奥琵琶湖
葛籠尾崎を眼前に望む東浅井郡朝日村尾
上(現長浜市湖北町尾上)の真宗寺院の長
男として生まれました。

幼少のころから歴史に興味を持っていた小江氏は、昭和8年(1933)、九州帝国大学に入学し国史学を学びますが、とくに考古学への造詣を深め、卒業後は京都学芸大学(現京都教育大学)で教鞭を執る一方、各地で精力的に調査活動をおこないました。県内では、東浅井郡浅井町醍醐遺跡(現長浜市醍醐町)、坂田郡山東町梓河内・柏原(現米原市)の番の面遺跡や杉沢遺跡・入江内湖遺跡(入江他)等の調査を実施し、縄文時代を中心とした大きな研究成果をあげられています。

琵琶湖畔で生まれ育った小江氏は、琵琶湖底からイサザ漁によって引き上げられた土器に興味を持ち、これらの存在から湖中に人間生活の痕跡(遺跡)の存在を予見されました。国内のみならず海外の水中遺跡についても知見を述べられるとともに、自ら調査し、その成果を紹介されました。とくに、昭和34年(1959)の「琵琶湖総合調査」(琵琶湖学術研究会)では、葛籠尾崎湖底遺跡において日本ではじめて考古学調査でスキューバ潜水を取り入れられました。さらに、考古学調査における自然科学等の他分野との協働など、今日につながる調査・研究方法を主張されています。



葛籠尾崎湖底遺跡資料館の縄文土器



葛籠尾崎湖底遺跡資料館の展示風景
(長浜市湖北町尾上区)



北近江の遺跡の
研究と保存に
力を尽した
考古学者なんだ

1. 番の面遺跡（米原市梓河内・柏原）

番の面遺跡は、米原市梓河内と柏原の境、^{りょうぜんざん} 霊仙山と^{きよたきやま} 清滝山にはさまれた峡谷部の台地上にあります。昭和29年、畑の開墾で縄文土器片30数個が出土しました。京都大学考古学教室で鑑定され、京都学芸大学小江慶雄氏により昭和30年7月に発掘調査がおこなわれました。このときの調査の最も大きな成果は、近畿地方ではじめて縄文時代の竪穴住居跡が見つかったことで、一躍、番の面遺跡を有名にしました。また、土器はこの地域を代表するものとして「番の面式」と名付けられました。住居跡は、長野県や岐阜県で見ついているものと構造が似ています。土器も東日本的なもので、この遺跡が^{しなの} 信濃・^{ひだみの} 飛騨・美濃等との文化的交流のもとに成立していることがわかりました。

梓河内には、昭和30年以降、遺跡で拾われた石器が約320点保管されています。ほとんどが矢の先に取り付ける石鏃で、石材は青色、黄色、白色、透明、不透明などカラフルな色のチャートです。大きさや形から細かく八種類に分類できます。わずかな調査面積にもかかわらず、これだけ多量の石鏃が出土している遺跡は県内には見当たりません。実は、遺跡の近くに良質のチャートの露頭があり、番の面の縄文人はこの石材を利用して石鏃を作り、周辺の村々に供給していた「石器作りのムラ」だったようです。



番の面遺跡の現状



竪穴住居跡（昭和30年）



番の面遺跡を望む

竪穴住居が
はじめて
見つかったよ



番の面遺跡出土遺物



番の面遺跡出土の石鏃

東日本との文化交流

遺跡がある台地は番の山とよばれ、名神高速道路と国道21号線によって分断されています。いまでも交通網が集中するこの地は、古代の東山道の不破とうさんどう ふわの関なかせんどうに近接します。近世中山道の近江最初の宿場は柏原で、ここから、北陸にいたる北国脇往還ほっこくわきおうかんへも分岐します。西へは山間を抜けて醒井さめがいから、琵琶湖岸の朝妻湊あさつまみなと、さらに湖上を畿内へ。ここは、主要街道の門戸的な位置にあたり、それは縄文時代からはじまっていた。

2. 醍醐遺跡（長浜市醍醐町）



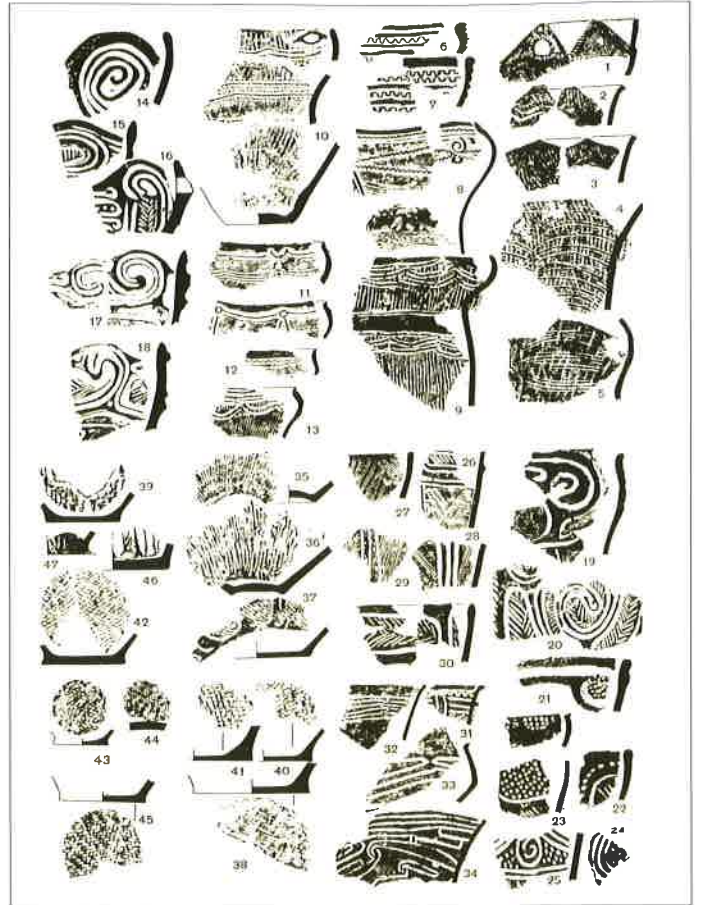
縄文土器



縄文土器



縄文土器（京都教育大学教育資料館写真提供）



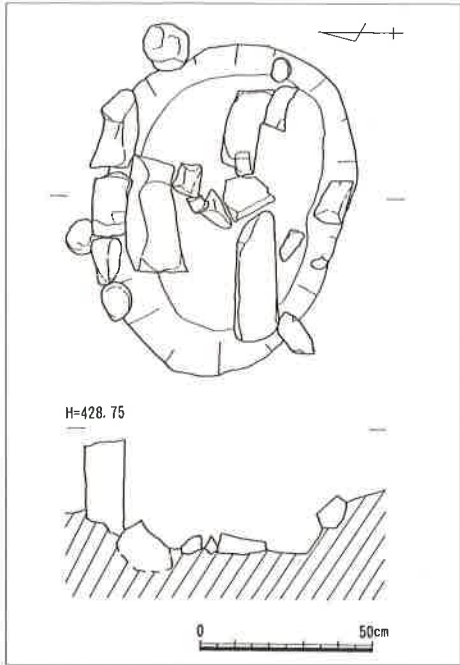
出土遺物実測図（京都学芸大学学報1956より）

醍醐遺跡は、長浜市醍醐町の草野川上流の左岸、七尾山西斜面の標高約190mの高台に立地しています。

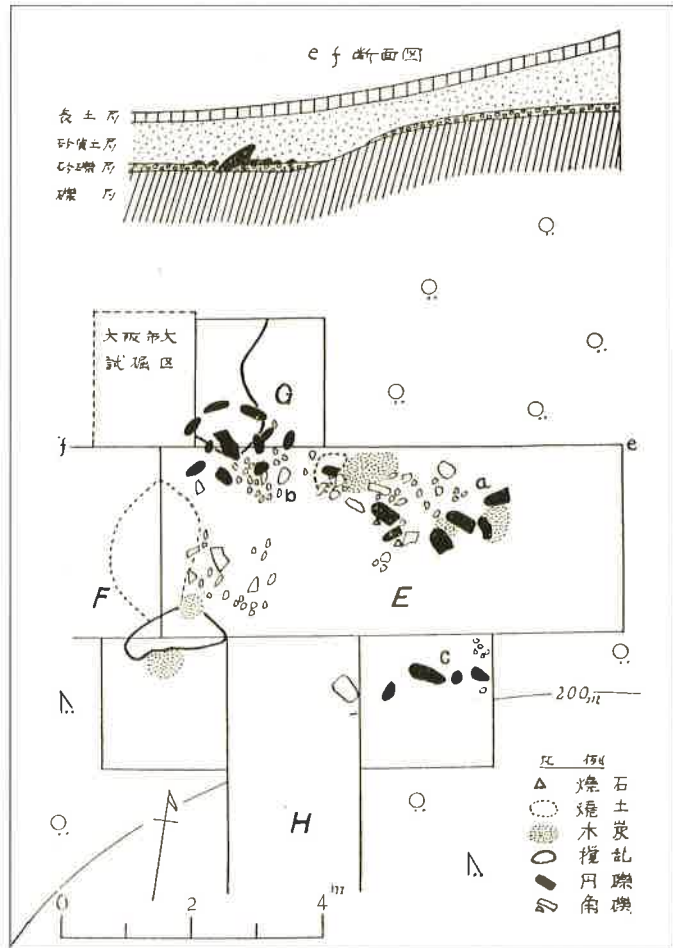
昭和26年、27年に京都学芸大学（現京都教育大学）史学研究室の小江慶雄助教授による学術調査がおこなわれ、立石を伴う円形配石遺構とその他の配石遺構、および焼土、多彩な遺物が見つかりました。当時、縄文時代の遺跡は東日本で多く発見されていましたが、西日本ではまれで、県内で本格的におこなわれた縄文時代の遺跡の初期の発掘調査事例として注目されました。出土した土器は、縄文中期初め頃（約5,000年前）から後期中頃（約3,500年前）を中心とするもので、当時、近畿地方の中期を代表する土器として「醍醐Ⅰ・Ⅱ式」や「醍醐・咲畑様式」として知られました。器形は、煮炊きに使われる深鉢、盛り付け用の浅鉢で、後期には液体を入れた注口土器も見られます。

配石遺構 —石をならべた縄文人—

土器のほかに、近畿地方の縄文文化研究に大きな課題を与えたのが「配石遺構」です。現在でも県下で12カ所ほどしか見つかっていませんが、立石を中心に直径約1.5mの大きさに人頭大の石を円形にならべた祭の跡で、中期終り頃に東日本から伝わり、後期には県内に広がりました。



配石遺構実測図（米原市起し又遺跡）



配石遺構実測図（醍醐遺跡）

起し又遺跡（米原市曲谷）

醍醐遺跡がある草野川の谷と、山をはさんで東側にある起し又遺跡も同時期の縄文遺跡です。発掘調査では、5棟の竪穴住居のほか、柱状の石を添えて土器を埋設した遺構、醍醐遺跡と同じような立石や配石遺構など、縄文時代の生活や精神文化をうかがわせる遺構群が発見されました。石器類では、漁網のおもりとして使われた石錘が半数以上で、醍醐遺跡では8割近くを占めます。石錘が石器の主体を占める状況は、古橋遺跡、川合遺跡（長浜市木之本町）など北近江の山麓に展開する中期の遺跡に共通して見られます。川魚漁を食料獲得方法の中心とする文化圏があったようです。



配石遺構



埋め甕



石斧・石錘（右側4点）



縄文土器



絵／早田 まな（滋賀県埋蔵文化財センター提供）

3. 葛籠尾崎湖底遺跡（長浜市湖北町尾上）

琵琶湖の湖底深くからはじめて土器が引き上げられたのは、大正13年(1924)12月のことです。引き上げられた地点の水深は三〇尋ひろ（一尋約1.8m）、引き上げたのは尾上の漁師で、イサザ漁の網に入っていました。イサザはハゼ科の5cm前後の魚で、泥地に潜る性質があり、葛籠尾崎の東側の水深の深い地点は絶好の底曳き網そこびきの漁場でした。

湖底にある遺跡は、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡です。竹生島ちくぶしまを間近に望む葛籠尾崎の先端から東沖10～700m、葛籠尾崎の湖岸に添って北へ数キロの範囲、水深10～70mの湖底に位置しています。

その後も次々に土器が発見され、遺跡の所在が明らかとなりました。現在までに引上げられた遺物の総数は約140点で、ほとんどが完形品です。縄文時代のほぼ全時期（約8,000年前～約2,300年前）、弥生時代中期・後期（約2,100年前～約1,800年前）、古墳時代（約1,750年前～1,400年前）、平安時代の各期の土器が見られます。小江氏は資料の散逸を防ぎ、『琵琶湖湖底先史土器序説』『水中考古学研究』をまとめられました。



琵琶湖湖底の土器（滋賀県埋蔵文化財センター提供）



湖底から引き揚げられた縄文土器
(葛籠尾崎湖底遺跡資料館蔵・長浜市教育委員会写真提供)



湖底から引き揚げられた弥生時代から平安時代の土器
(葛籠尾崎湖底遺跡資料館蔵・長浜市教育委員会写真提供)

なぜ、湖底に沈んだのか？

湖北町教育委員会と滋賀県教育委員会の調査結果から、①土器は水深10mから最深部の60～70mまで分布している。②縄文時代早期から平安時代後期までにおよぶが、弥生前期や奈良時代など遺物が見られない時期がある。平安時代は皿類が多く日常器が少ない。③土器は湖底に埋没せず、多くは完形品で湖底面に正位置で口縁部を上に向けた状態で沈んでいる。④葛籠尾崎の湖岸周辺の水深10～30m付近は平安時代の皿類が多くみられる。という特徴がわかりました。葛籠尾崎湖底遺跡が、どのようにして形成されたかについて、多くの研究者がさまざまな説明を試みました。湖岸遺跡からの「遺物流出説」、祭祀により土器を沈めた「祭祀説」、船が沈没・転覆したため積荷の土器が沈んだとする「船舶の沈没説」、葛籠尾崎の地滑りによる「遺跡の沈下説」等がありますが、いずれも納得のいくものとなっていません。小江氏も『琵琶湖湖底先史土器序説』で「湖底遺跡は吾々の関心を無視するかの如くに、神秘の幕を閉ざして今もなほ眠っているのである」と記しています。



尾上漁港から雨にけむる葛籠尾崎を望む

湖成鉄にまつられた縄文土器 (写真上)

葛籠尾崎湖底遺跡で発見されたもっとも古い土器は、「深鉢」とよばれるもので、約8,000年前(早期中葉)のもので(写真右)。左端の土器は約5,300年前(前期後葉)の深鉢で、土器の表面には縄文が丹念につけられています。真ん中奥の土器は、葛籠尾崎湖底遺跡を代表する資料で約4,000年前(中期後葉)の完形品です。縄文土器には、水中の鉄分(湖成鉄)が付着しています。数千年間にわたる付着は、鉄のメッキを施したかのような分厚さです。

弥生時代から平安時代の土器 (写真下)

弥生土器は、口の部分を細くした「壺」など、縄文土器とは形が大きくかわります。胴体にわざと穴をあけた壺や、磨製石斧なども見つかっています。古墳時代では壺のほか、横瓶、平瓶など液体をそそぐ器種がみつかっています。奈良時代の遺物はほとんどなく、平安時代中頃(約800年前)の素焼きの皿がきれいな形で見つかっています。



湖上を航行する丸木舟(想像図)
絵/早田 まな(滋賀県埋蔵文化財センター提供)

在野の研究者群像

Ⅲ 粕淵辰次 採集資料

1. ときをこえて、多種多様な遺物

小江氏ら研究者が北近江で精力的に調査を進めるにあたって、地元でこれをサポートし、地道な調査、研究を進めた在野の考古学徒が、米原市内にもおられます。粕淵辰次氏(高溝)、磯崎文五郎氏(磯)、樋口元氏(杉沢)などです。

土器や石器などは、雨あがりの田畑を注意深く歩くと、ときに1、2点採集することができます。このときが考古資料採集調査の出発点です。こうして得られた資料は、貴重な情報となって積み重ねられ、時を越えて、その土地の成り立ちを明らかにしてくれます。

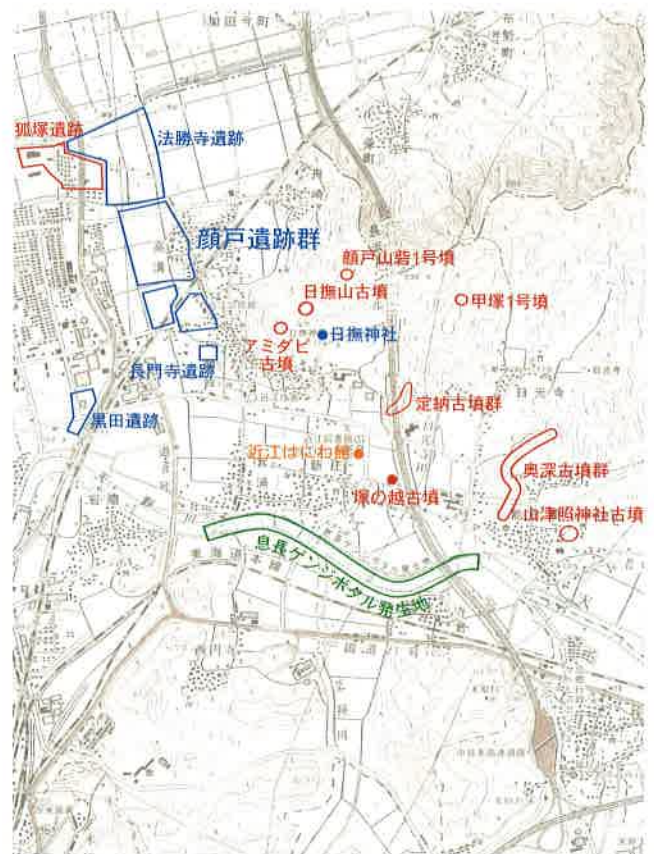
粕淵辰次氏のコレクションは、高溝の地域内で、ご自身で集められたもので、縄文の古いころから中世に下るものまで広範囲です。高溝を中心に、近江地域の歴史の深さを物語るのに十分な質量に目を見張ります。さらに、資料1点1点に、採集された場所と年月日などが正確に記録されています。後学のわれわれは採集状況を容易に追体験できます。また、自宅の一室を解放され、おおくの研究者にこころよく資料を提供されるなど、近江の考古学の発展に寄与された功績は多大なものがあります。



多くの研究者と
交流があった



粕淵辰次 (1903~1995)

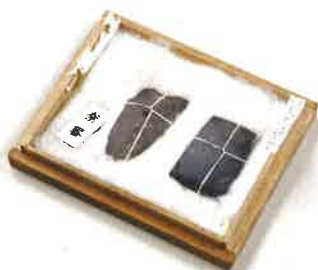


高溝周辺の遺跡群

粕瀨辰次氏は、明治36年(1903)、^{ひなでむら}日撫村高溝(現米原市)に生まれ、農業のかたわら、^{ざいごうぐんじんかい}村の青年団長や在郷軍人会分会長、^{こばやしゆきお}村会議員などを務められました。昭和12年(1937)、京都大学の^{こばやしゆきお}小林行雄氏に所蔵石器の鑑定を受け、以後考古学に熱中されました。昭和49年から20年間滋賀県文化財保護指導員を務められています。



“県下最古の石器” 局部磨製石斧 (左上)



“祭の道具” 有孔磨製石斧 (左)



石匙 (右)





古い石器から
鎌倉の土器まで



採集遺物実測図 (1 弥生土器、2~5 古式土師器、6~9 須恵器、10 灰釉陶器、11・12 瓦、
13 局部磨製石斧、14・15 紡錘車、16~18 石器類 『息長氏論叢』3より)

粕淵辰次氏の資料は、米原市教育委員会に寄託いただいています。その点数は326点を数えます。そのほとんどが高溝で採集された遺物です。縄文時代から中世におよぶ縄文土器、弥生土器、古式土師器、須恵器、土師器、灰釉陶器、緑釉陶器、山茶碗、石器、玉類、土製品、木製品、青銅器、鉄器、屋根瓦、骨角器、自然遺物など多岐にわたります。採集の時期も昭和12年から平成元年までにおよびます。これらの遺物の質と量は、高溝遺跡を単体としてとらえるのではなく、北に隣接する法勝寺遺跡群と南の顔戸遺跡群とが有機的に結びついた遺跡群としてとらえる必要があります。調査はこれから進めていきますが、資料のなかには、縄文時代の古い時期の局部磨製石斧、中部地方産の石材を用いた大型の石匙、祭器と思われる有孔磨製石鎌、新羅系とされる軒丸瓦や、これまでの調査で確認されていない時期の平安時代末の緑釉陶器や鎌倉時代の山茶碗などがあります。

2. 高溝周辺の遺跡が語る近江地域の開発史

高溝遺跡は、顔戸遺跡^{ごうど}、長門寺遺跡^{ちやうもんじ}、正光寺遺跡^{しょうこうじ}を含む「顔戸遺跡群」として報告されています。粕瀨氏の採集資料が示すように、近年、開発に伴う発掘調査では、縄文時代の前期から晩期にかけての多量の遺物。次いで、弥生時代後期から古墳時代中期にかけての大規模な集落跡や倉庫跡などの遺構。さらに、集落を囲む環濠^{かんごう}(堀)と考えられる大規模な溝の遺構が高溝遺跡や顔戸遺跡で検出されています。さらに、平安時代(9世紀)には条里^{じょうり}が普及することから、水田管理の建物群が随所に認められ、さきの大溝遺構や小規模な河川がこの時期に埋められ、縄文時代や弥生時代、古墳時代の遺跡が削平されたり、埋められたようです。条里は11世紀に入り完成したと想定されています。

顔戸遺跡の北側に隣接して法勝寺遺跡群(法勝寺遺跡^{きつねづか}、狐塚遺跡^{いかり}、奥松戸遺跡^{いかり}、礎遺跡)があります。弥生時代中期から後期にかけての低墳丘墓群^{ていふんきゅうぼく}や古墳時代の2つの小規模古墳群や古代寺院跡がみついています。いずれも、近江地域の開拓を物語る貴重な遺跡群です。



狐塚5号墳出土の埴輪



法勝寺麁寺の瓦 (平安時代)



法勝寺麁寺軒丸瓦 (白鳳時代)



粕瀨辰次氏が建立した「白鳳時代法勝寺跡」石碑

IV 磯崎文五郎 採集資料

1. 干拓にかよい歴史を探求



磯崎文五郎 (1906~1994)



入江内湖の干拓事業

入江内湖干拓と磯崎文五郎

JR米原駅より西側から琵琶湖の間に広がる水田地帯には、かつて入江内湖^{いりえないこ}という、広さ約300ha、周囲約8km、水深0.6~1.8mを測る県下第二の面積の内湖がありました。豊富な水産資源をもった入江内湖は、古来より良好な漁業の場として利用されてきました。しかし、第二次世界大戦末期に食糧難に陥ったことで農地開発の機運が高まると、琵琶湖干拓事業の一環として、入江内湖の干拓が昭和19年から25年にかけて実施されました。

昭和19年に干拓がはじまり、広大な湖底が露出すると、全域から土器などの大量の遺物が出てきました。しかし、戦中のことであり考古学への関心は薄く、昭和24年に小江慶雄^{おえよしお}氏が南西部の小区画を試掘したのにとどまりました。磯崎文五郎^{いそざきぶんごろう}氏は陸地化する過程で熱心に遺物を採集され、採集品は琵琶湖干拓資料館に展示されています。磯崎氏は、入江村磯(現米原市)に生まれ、小学校を卒業すると家業の農業に従事されました。当時学校で教える古代史は神話に基づいたものでしたが、磯崎氏は独学で考古学を勉強し、20代のころから遺物を拾い集めて、遺跡を調べて歩かれました。

磯崎氏の調査によると、遺物の分布状況は、西野、明神、丸葺、善積の各地区の全域に及んでいました。拾い集められた遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石斧、古銭、土錘^{どすい}、木製の弓など百余点にのぼります。なかでも弥生時代の鹿角製品は注目されました。全長約23.6cm、鋭利な刃がついており、武器の戈か小刀ではないかと考えられました。

採集資料

縄文時代は早期の尖底土器のほか、石棒、凹石、磨石、石鏃や骨角器の鋸があります。弥生時代は後期の土器片のほか、鹿角製戈4点と又鋏1点があります。古墳時代で注目されるのは韓国慶尚南道金海郡や釜山市出土のものに類似する伽耶系の蓋と長頸壺です。古代は平安時代後期の灰釉陶器が多く、「錦谷」「東」などの墨書土器があります。これ以降の遺物は皆無で、遺跡と内湖に大きな変化があったと考えられています。



入江内湖遺跡位置図



入江内湖の様子（米原駅付近から）

収集・保管・研究の熱意がすごいね



韓式土器 蓋（琵琶湖干拓資料館蔵）



古代寺院の鷗尾（長浜城歴史博物館寄託）



鹿角製戈
（琵琶湖干拓資料館蔵）



韓式土器 長頸壺
（琵琶湖干拓資料館蔵）

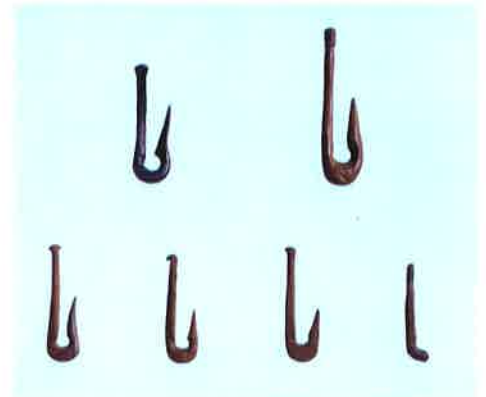
2. タイムカプセル"入江内湖遺跡"

昭和51年(1976)の西野地区の発掘調査にはじまり、これまで数度の発掘調査がおこなわれてきました。各時期の土器をはじめ、縄文時代の骨製のヤス、釣針、石錘や、古墳時代の鉄製ヤス、漁網の土錘や浮子など、漁業に関わるものが多くふくまれています。また、入江内湖遺跡は良好な木製品の宝庫で、縄文時代の丸木舟や漆塗りの器のほか、古墳時代のクワ、スキなどの農耕具、たも、弓、櫂なども見つかっています。とくに丸木舟は5艘出土しており、なかでも5号丸木舟は前期前半(約6,500年前)のもので全国最古級の舟です。丸木舟は、漁業の場を拓いただけでなく、物資運搬や交流範囲拡大など縄文社会に大きな影響をもたらしました。このほか、

- ①関西最古級の釣針(縄文時代中期末)
 - ②マグロの脊椎骨(縄文時代早期から後期初頭)
 - ③炭化した球根(ノビルの仲間/縄文時代前期中頃)
 - ④列島最古級の漆器碗(縄文時代前期中頃)
- など注目される遺物が見つかっています。



5号丸木舟



鹿角製や猪骨製の釣針



マグロの骨(縄文時代)



4号丸木舟



漆器碗出土状況

行政発掘と大学との協働

V 行政発掘のはじまり

1. 北近江での調査

北近江における、開発に伴う行政発掘は、北陸自動車道建設にともなう桜内遺跡や黒田長山古墳群等の調査をはじめ、国道8号、365号のバイパス工事や、各地で始まったほ場整備関連の調査が滋賀県教育委員会によりおこなわれ、昭和60年前後に各町に担当者が配置され、考古学的調査が進められ、多くの資料と情報が蓄積されました。

桜内遺跡（長浜市余呉町坂口）

弥生時代後期(約1,900年前)から平安時代まで継続した遺跡です。中央を流れる谷川を中心に南と北に分かれ、各々から50棟以上の^{たてあな}竪穴建物が見つかり、^{ほいま}墓域と考えられる^{ほうけいしゅうこうぼく}方形周溝墓群が、黒田長山古墳群の下方に広がっていました。竪穴建物からは、当時貴重だった銅鏃が37点見つかるなど特異な様相を示しています。桜内遺跡は、近江から日本海に抜ける後世の北国街道^{ほっごくかいどう}を掌握する位置に立地していることにより、大きな力を持ち続けることができたのだと考えられます。



桜内遺跡竪穴住居跡

黒田長山古墳群（長浜市余呉町坂口）

桜内遺跡の墓域と考えられる遺跡です。弥生時代後期後半から古墳時代前期(約1,850～1,700年前)に造られた17基の^{ほうけいていふんきゆうぼく}方形低墳丘墓群と、古墳時代中期後半(約1,550年前)の円墳21基の古墳群からなります。このうち1基の古墳主体部から組合せ式の^{もつかん}木棺が2基見つかり、南の棺には短甲1両、鉄剣3本、鉄鏃50本等が、北の棺には短甲1両、鉄刀類5本、鉄鏃50本等が副葬されていました。主要路を軍事的に掌握した人達の墓と考えられます。



黒田長山古墳群調査区全景



短甲（黒田長山古墳群）

2. 米原市内での発掘調査

北方田中遺跡（米原市北方）

奈良時代末期の^{ほったてはしらたてもの}掘立柱建物11棟、平安時代の掘立柱建物14棟をはじめ、溝跡や四脚門跡、鎌倉時代の井戸跡3基、道路状遺構などがみつかりました。掘立柱建物には、倉庫や土間がある建物、底が三面につく格式の高い建物が含まれ、これらの建物は、ほぼ南北方向に整然と並んでいました。ある一定期間、多くの建物が並び、掘立柱建物の構造や規模、須恵器、土師器、^{えんめんけん}円面硯、^{もつかん}木簡などの出土品などから、この地方を治めた郷長の役所、屋敷跡ではないかと考えられています。



北方田中遺跡掘立柱建物群（滋賀県埋蔵文化財センター写真提供）



三大寺廃寺の瓦(白鳳時代)

基壇跡



塚原2号墳出土遺物



塚原2号墳出土状況

塚原古墳群・三大寺廃寺(米原市枝折)

三大寺遺跡群の調査は、市内でおこなわれた早い時期の行政発掘です。昭和57年、小字塚原で発掘調査がおこなわれ、6世紀後半から7世紀前半の古墳3基と、6世紀末から7世紀初頭の集落跡、7世紀後半から8世紀初頭の寺院建物の基礎となる基壇が見つかりました。

明治36年、^{さめがい}醒井小学校校地で^{はくほうしだい}白鳳時代(7世紀後半)の瓦が多量に出土して、寺院の存在がわかりました。塚原地区の発掘で出土した基壇は東西24m×南北21mで、周りには大量の瓦が集められていて、三大寺の建物跡であることが確認されました。しかし、これ以外の寺院遺構は見つからず、山が迫った^{かわらぶきたても}周辺の地形から、壮大な伽藍が立ち並ぶものではなく、瓦葺建物一棟のみであった可能性が指摘されています。塚原地区の建物には、軒瓦の文様から坂田郡の古代寺院に共通する山田寺式とよばれる瓦が葺かれていました。一方、小学校校地からは、この瓦とともに奈良^{ふじわらきやう}藤原宮の本薬師寺で使われている瓦ととてもよく似たものが見つっています。醒井^{おきな}周辺は古代豪族息長氏から分住した、息長^に丹生真人一族の居住地といわれています。

米原から始まった
北近江の考古学



これから、如何なる
進展があるのか、
ぞう、ご期待



【参考文献】

- 林 博通1998『古代近江の遺跡』
- 田中勝弘2007『遺跡が語る近江の古代史』
- 湖北町教育委員会2009『琵琶湖の神秘 一葛籠尾崎湖底遺跡一』
- 滋賀県教育委員会2005『滋賀県文化財学習シート 遺跡編』
- 浅井町1998『醍醐遺跡』
- 立命館大学文学部2012『杉沢遺跡 一2011年度試掘調査概報一』
- 入江干拓土地改良区1987『入江内湖の変遷』

VI 新しいあゆみ ー大学との協働ー

1. ふたたび杉沢遺跡の発掘

最後に、平成23・24年度に滋賀県教育委員会の指導を受けながら、米原市教育委員会が立命館大学とともにおこなった杉沢遺跡の調査について紹介したいと思います。

大正13年(1924)の石器発見以降、杉澤では、これまでに縄文時代晩期終り頃の11組の土器棺が散発的に見つかっていますが、住居等、墓以外の縄文時代の生活の痕跡はよくわかっていませんでした。

平成23年度の調査では、とくに縄文時代の住居の検出に重点が置かれました。住居が明らかになれば、杉沢遺跡の全体像を有機的に説明することができ、遺跡への理解と愛着が一層深まります。墓に住居が隣接するかどうかという、晩期集落構造の議論にも貢献できます。結果的には、住居の検出にはいたりませんでした。貯蔵穴^{ちよぞうけつ}1基、土器を利用した墓^{はしらあなじょうしゅう}1基、柱穴状小土坑^{とこう}2基などの晩期の遺構を確認し、調査区またはその近くに住居がある可能性が高まりました。つづく24年度の調査でも新たな貯蔵穴が見つかり、自然科学的な分析がおこなわれました。また、石を用いた土器棺以外の大人の墓と考えられる遺構も検出されています。

調査期間中、8月14日の杉澤区夏祭りには、学生たちが準備、運営のスタッフとして参画し、遺跡発掘が紹介されました。

米原市教育委員会主催の発掘体験や、地元春照^{すいじょう}小学校5・6年生の見学会では、学生たちが先生役をしました。現地説明会で成果が報告されたほか、京都市考古博物館の企画展『はじめまして！考古学～大学で学ぶ発掘～』でも展示されました。地域とともにあゆむ新たな取り組みとして、期待されています。

発掘調査の様子



夏祭りのひとこま(杉澤勝居神社境内)



宿舎での整理作業



子どもたちの発掘体験



【協力者・協力機関（敬称略）】

粕渕宏昭・磯崎 清・山根正晴・高橋健太郎・高瀬神社・滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会
滋賀県埋蔵文化財センター・立命館大学・京都教育大学教育資料館・長浜城歴史博物館
長浜市教育委員会・葛籠尾崎湖底遺跡資料館・琵琶湖干拓資料館

北近江考古学事始め —地域史を語り続ける埋蔵文化財— 2013.3

米原市教育委員会 〒521-0242 滋賀県米原市長岡1050-1 TEL0749-55-8020 FAX0749-55-4556